

詩篇95篇

〔喜びの〕 賛美への招き

- 1 さあ、【主】に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。
- 2 感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。

《被造世界は主のもの》

- 3 【主】は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。
- 4 地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。
- 5 海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。

〔平伏の〕 賛美への招き

- 6 来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、【主】の御前に、ひざまずこう。
- 7 主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。

《背信の歴史の想起》

- 7 きょう、もし御声を聞くなら、
- 8 メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにはならない。
- 9 あのと、あなたがたの先祖たちはすでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした。
- 10 わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない」と。
- 11 それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、入れない」と。

今日から学んでいく詩篇95～100篇は「礼拝用詩篇」「招きの詩篇」と呼ばれ、礼拝の冒頭の「招詞」において読まれるにふさわしい詩です。礼拝に向かう姿勢が教えられており、神からの招きを受けてはじめて人は礼拝に参加しうるものだということが含意されています。礼拝とは献げる行為でありながら、実はすべての用意をしてくださっているのは神の側であるということです。だからこそ、礼拝は「招きのことば」が朗読されるところから始まるのです。

95篇は二つの「賛美への招き」を軸として構成されています。1～2節は「喜びの賛美」、6～7節は「平伏の賛美」と言ってもよいでしょう。本篇の大きな枠組みとして、前半部の1～5節は世界規模における創造主なる神への賛美、後半部の6～11節はイスラエル民族を養い導かれた神への賛美と捉えることができます。賛美にふさわしい姿勢というのも一つではなく、感謝と喜びをもって歌うこともあれば、自らの罪を悲しみながら歌うこともあるのです。

まず「喜びの賛美」について考えてまいりましょう。私たちが愛してくださっている神と出会う喜びに溢れて歌うのです。実際の礼拝では、最初の「讃詠」に当たるでしょうか。六日の旅路を経て、ようやく主の許、神の家に帰って来た喜びです。目、鼻、口だけではありません。顔中の毛穴が開くほどに、いえ、全身の細胞が沸き立つかのような喜びをもってこの賛美を主にささげたい。「今日もここに来ることができました!」「どんなにあなたを恋い慕っていたことでしょう!」と。このような賛美の姿勢は、契約の箱の前で踊り狂ったダビデから学ぶことができます(Ⅱサムエル6:12-15)。彼は、主が都に戻って来てくださったことに歓喜し、王という立場も忘れて踊り回りました。私たちも、主に賛美するとき、社会的な立場や日頃武装しているものから解放されることができます。

3節に「**【主】は大いなる神**」「**すべての神々にまさって、大いなる王**」という表現が出てきます。これは、ヤハウエなる神は全宇宙を創造し、地上では諸国を治めておられることを言い表しているでしょう。「**神々**」とは異教の神々を指していると思われませんが、本来礼拝されるべきただひとりの神がおられることを宣言しています。

「**地の深み**」「**山々の頂**」は、海の深みと山の高さの対照をなす表現です。現時点で観測されている世界最深の海底は11,034m、世界最高の山は8,848mとされています。海の底に人間が到達することはできないので、音波によって観測されるそうです。人には知り得ない領域が全世界に満ちており、それらすべてを造られた神の偉大さを誉め讃えるのです。

6節からは、新たな賛美の世界に入っていきます。「**伏し拝み**」「**ひれ伏そう**」「**ひざまずこう**」という動詞が立て続けに出てきますが、礼拝が進んでいくにつれ、自らを深く省みて主の御前にへりくだる姿勢へと変化していくことを示しているでしょう。イスラエルは、多くの民の中から特別に取り分けられた民ですが、神の民にふさわしい歴史を形成してきたわけではありません。「**牧場の民**」「**御手の羊**」(7節)という表現の内に、主が羊飼いのように民を導いてくださったことが表されていますが、その羊たちは牙を剥いて主に逆らったというのです。そのことが「**メリバ**」「**マサ**」という二つの言葉によって象徴的に表されていますが、これは荒野での道中、イスラエルの民が「喉が渴いた」と言って主に反逆した出来事を指しています(出17:1-7、民数20:2-13)。出エジプト後の生活の中に現れた民の反抗心は、これだけに止まるものではなく、彼らはモーセの帰りが遅いからといって金の子牛を作って拝み(出32章)、肉が食べたいと言ってエジプトへ帰りたがり(民数11章)、約束の地への入植を目前にして神の守りを信じませんでした(民数13章)。ここには書ききれないほど多くの不従順が、出エジプト記から民数記には記されています。

本篇が「**わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない」と。それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、入れない」**」(10-11節)と、赦しなき神のことばでもって終わっている点が気になります。しかも、10節の「**忌みきらい**」という動詞は未完了形であり、まるでその怒りが未だに継続しているかのような感覚すら覚えるのです。「**わたしの安息**」とは、当時はカナンの地に入ることそのものを指して言われたと思われませんが、この地は霊的意味が強く、私たちの「**救い**」を象徴的に表しています。今日の箇所と関連の深いヘブル3:7-4:11を読んでおきましょう。

7 ですから、聖霊が言われるとおりで。「きょう、もし御声を聞くなれば、8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。9 あなたがたの父祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。10 だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかった。11 わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」

12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がいないように気をつけなさい。13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。14 もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。15 「きょう、もし御声を聞くなれば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」と言われているからです。16 聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。17 神は四十年の間だれを怒っておられたのですか。罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか。18 また、わたしの安息に入らせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。19 それゆえ、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。

1 こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れなようなことのないように、私たちは恐れる心を持つてではありませんか。2 福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。3 信じた私たちは安息に入るのです。「わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」と神が言われたとおりで。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。4 というのは、神は七日目について、ある個所で、「そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた」と言われました。5 そして、ここでは、「決して彼らをわたしの安息に入らせない」と言われたのです。6 こういうわけで、その安息に入る人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえに入れなかったのですから、7 神は再びある日を「きょう」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞くなれば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」と語られたのです。8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。10 神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。11 ですから、私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

ここでヘブル書の著者が強調していることは、主の安息に入る道がまだ残されているということ。それは、私たちが罪から贖い給うキリストによるということ。この方を信じ、へりくだって主の御前に入るべきであるということです。真にささげられる礼拝は後回しにすべきではなく、「きょう」がその日だと言われています。私たちは、罪の赦しという安息を得たものとして、喜びをもって主の御前に出ることができる。それと同時に、常に自らの罪を認め、へりくだった心で礼拝をささげるべきなのです。